広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第40号　2012．3〉

これからの教育実習

― 国語科における観察実習の研究（２）―

村山　太郎　　金子　直樹　　江口　修司　　金尾　茂樹
石井希代子　　重永　和馬　　川中裕美子　　井上　　泰
竹盛　浩二　　竹村　信治　　川口　隆行　　小西いずみ
佐藤　大志　　間瀬　茂夫　　佐々木　勇　　田中　宏幸

１．はじめに

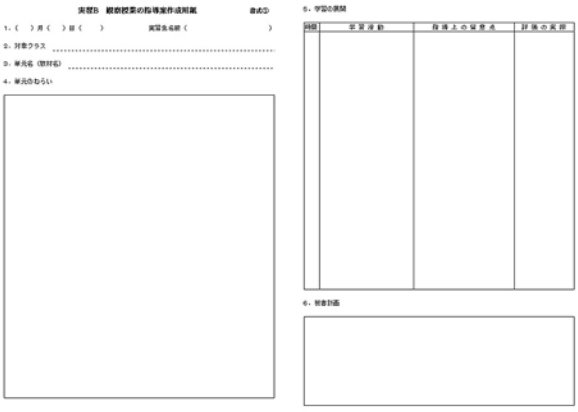
本研究は，より優れた中等教育授業者を育成する国語科教育実習のあり方を求めて，観察実習において実習生に生起している出来事の記述，分析，考察を行うことで，

①観察実習の在り方

②中等国語科教員養成プログラムの教育内容の体系化にむけた提言を試みるものである。

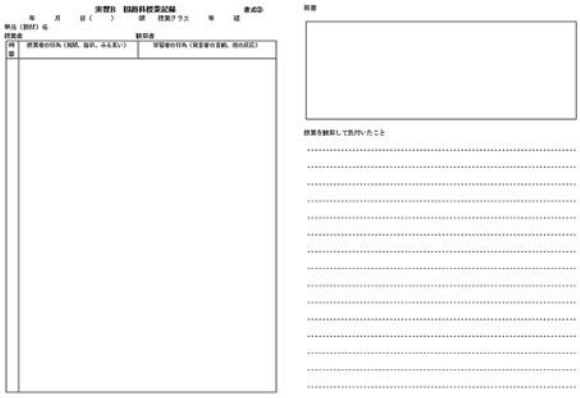
研究の方法は，当校国語科で開発した記録用紙への観察実習生の記述を具体的な対象とし，観察実習において実習生に生起している出来事の記述，分析，考察を行う。そのために，観察実習生と示範授業との関わりを可視化する記録用紙を開発した。記録用紙作製の観点と記録用紙の実際は以下のごとく。

［１］示範授業と同教材を対象とした観察実習生による事前授業構想記録（書式①）



［２］示範授業の観察記録（書式②）

［３］観察直後に得た気付きの記録（書式②）



［４］示範授業後の授業者による講義記録（書式③）

［５］発展授業構想の記録（書式③）

以上のように，［１］～［５］の観点から，示範授業観察前（書式①）と示範授業観察（書式②），示範授業観察後（書式③）の三つの場面での，観察実習生が

Taro Murayama, Naoki Kaneko, Syuji Eguchi, Shigeki Kanao, Kiyoko Ishii, Kazuma Shigenaga, Yumiko Kawanaka, Yasushi Inoue, Koji Takemori, Shinji Takemura, Takayuki Kawaguchi, Izumi Konishi, Takeshi Sato, Shigeo Mase, Isamu Sasaki, Hiroyuki Tanaka: Notes of the teaching practice on the Japanese language education (2)

記述できるよう用紙を開発する。

上記［1］〜［5］の観点に即した実習生の諸記録に基づき，示範授業を観察することで，実習生自らが自己の〈国語の授業〉観を問い直し更新しようとする教育実習のあり方を実現するために，研究二年次である本年度では観察実習生の主要な課題と，その課題に対する働き掛けとして観察実習の記録シート開発の観点とを，析出することとする。また，以上の研究成果を，「国語科における観察実習の研究（1）―資料編」として発刊することで，全ての観察実習生の記録と基礎分析資料とを発表する。

2．事前指導案の概観

今年度の教育実習Ｂにおける観察実習生の課題を，実習生による事前指導案の記述からまずは概観しよう。

〔記述群Ａ〕＝小原嘉昭「モンシロチョウの手旗信号」（学校図書『中学生の国語　1』採録，評論文，対象学年：中学一年生）を教材とした観察実習生の記述

① 単元目標２．文章の中心的な部分と付加的な部分，事実と意見などとを読み分け，目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえさせる。

② 本教材では，文章内のモンシロチョウの実験の方法・目的をおさえたうえで，仮説→観察→結果→考察という過程をしっかりおさえ，まとめる。また，失敗という事実を受けとめる行為によってもたらされる効果などについて考え，生徒のものの見方・考え方を広げることを目指す。

③ 筆者がどのように課題に対する仮説を立てていったのか本文にそって読み取らせる。この仮説は前提がまちがっていたわけだが，その後の仮説の立て方は丁寧な観察と考察によるものである。学習者が今後さまざまな課題にぶつかった時にどのようにするかという考えを教えてくれるものといえる。また仮説がくずれた後の筆者の考え方もひとつの示唆を与えてくれるだろう。そこで今回は身近な疑問をこちらから提示し，それに関する観察の結果や事実などをもとに説明文を書かせる。根拠をもった文章の書き方を学ばせたい。

〔記述群Ｂ〕＝田口ランディ「クリスマスの仕事」（学校図書『中学生の国語　2』採録，物語文，対象学年：中学２年生）を教材とした観察実習生の記述

④ 表現や登場人物の発言・行動を深く読んでいくことで，登場人物の心情とどのように関わってくるのかを考え，それをキーワードとして登場人物である「僕」の心情変化の流れを読み解いてゆき，そこから，僕が感じ取ったこと，この小説で筆者は何を伝えたかったのかと言うことを考えさせる。

⑤ 表現から登場人物の心情の変化を追い，その心情を自分の生活に結びつけて考えられるよう，ものの見方，考え方，感じ方を拡げることを目指す。

⑥ 植物状態の聴衆に向けて演奏することで，それまでとは違った音楽への向かい方をする「僕」の心情変化を読みとりたい。「与えてる人たちが，実は与えられてるんだな。」の部分から，この物語を通して誰が誰にどんなものを与えたのか考察したい。そして，自分の身の回りにある「小さな幸せ」に気づけるよう進めることとする。

記述群ＡとＢとは，それぞれ小原嘉昭「モンシロチョウの手旗信号」と田口ランディ「クリスマスの仕事」を対象教材とし，記述されたものである。記述群Ａには，「文章の中心的な部分と付加的な部分，事実と意見」（①）や「仮説→観察→結果→考察という過程」（②）といった議論の展開（二重棒線）に着目することで，本教材の文章を「まとめ」（②），「要旨をとらえさせ」（①）ようとする単元構想（棒線）。記述群Ｂには，主人公の「心情変化」（④，⑤，⑥二重棒線）を読むことで，「『僕』の感じ取ったこと，この小説で筆者は何を伝えたかったのかと言うことを考えさせ」ようとする単元構想（④棒線）が，それぞれ確認できよう。このように，教材テキストの種類（評論文・物語文）に即して共通する単元構想の仕方が事前指導案の記述には散見される。

これらの記述は，本文の伝えたいことを理解させるために具体的な着眼点をいずれも明示しようとする点で，国語の授業者としての現実的な立ち居振る舞いに思いが至っているとはいえよう。実際の授業の場で教材テキストを一読して「みなさん分かりましたね。では……。」などという展開はあり得まい。教材テキストの読解の観点をいかに設定するのかは，授業者としてまずは考えること。そうした思慮を一旦は経ているとこれらの記述は見えるからだ。

一方で，これらの記述ぶりは国語の授業に対する観察実習生の認識上の一定の閾を伝えるものでもあろう。というのも，こうした単元構想の仕方は，単元での学習活動が教材テキストの読解で終わっていたり

(①，④)，読解を踏まえた上で教材テキストの伝えたいことを学習者になぞらせる活動（②，③，⑤，⑥波線）で終わっていたりする点で類型的だからだ。つまり，多くの観察実習生にとって国語の授業とは，学習者が教材テキストの主張や考え方をまず知ること。そして，教材テキストの主張や考え方に自己同定し，それを再表象するようになる営みのことである。そうした〈国語の授業〉観の閾を，上掲の記述群はよく伝えもするのである。

この〈国語の授業〉観の問題点はいくつかあるが，教条主義的まなざしにつらぬかれた単元構想の仕方という言い方にそれは集約できるだろう。教材テキストは「学習者が今後さまざまな課題にぶつかった時にどのようにするかという考えを教えてくれるものといえる。また仮説がくずれた後の筆者の考え方もひとつの示唆を与えてくれる」(③) ものとする観察実習生の言葉が端的にそのことを指し示している。そこでは，教材テキストは絶対的に正しいことを教えてくれるものであり，学習者はその教条に対して完全に受動的な了解を期待されているのである。

むろん，これは，教材テキストの主張や考え方と学習者という関係に対する慎重な思慮を著しく欠くものである。そこには，学習者が今どういう価値観を絶対化していて，どのような問題点があるのか。そうした学習者が，どのような教材テキストと出会うことでいかなる反応をするのか。そして，授業を通していかに働きかけることでいかなる変容を期待するのか。そのような疑問でもって考え単元を構想しようとする姿勢はない。これこそが，本年度教育実習Ｂ事前指導案に見える，観察実習生の抱える課題である。

さて，ここで，この課題出来に関わったと見られる，上述の単元構想に潜むテキスト観について指摘しておこう。

発話の「対話」性を主張した，ロシアの文芸学者ミハイル・バフチンは，「規範的に同一な諸形態の体系としての言葉」を捉えようとする「言語学」(「文献学的言語学」) に共通するテキスト観を以下のように述べる。

> 文献学的言語学者は，古文献を…（中略）…あたかもそれが自立的で孤立したひとまとまりのものであるかのようにみなしており，能動的なイデオロギー的了解ではなく，あらゆる真の了解にあるような応答をまったく欠いた完全に受動的な了解を，それに対置させている。(ミハイル・バフチン，〔訳〕桑野隆（2002)「西欧における最新言語学思潮」せりか書房，PP.78.)

また，このテキスト観に対して，バフチンは，「先行者たちの著作を引き継いだり，それらと議論をたたかわしたりまた能動的な応答ある了解を期待したり，その了解を見越したりする」といった，発話（言語テキスト）の現実を捨象している点で，言語テキストの真の姿を捉えていないと批判する。

注目したいのは，俎上に上せられているテキスト観がテキストと了解者（聞き手・読者）との関係を，後者が前者に対して「完全に受動的な了解」をするものと規定しているところである。これは，教材テキストに対する学習者の了解の過程を，教材テキストの「伝えたいこと」に自己同定しそれを再表象することと描いていた観察実習生の単元構想のそれと重なるものでもあろう。

テキストを「自立的で孤立したひとまとまりのもの」と眺めること。これが多くの観察実習生の事前指導案に見える単元構想に潜むテキスト観である。先に指摘した観察実習生の課題は，おそらくはこうしたテキスト観から単元を構想するなかで生まれたものであろう。教材テキストが「自立的で孤立したひとまとまりのもの」であれば，それを学習者に教えるわけだから，テキスト内部の論理や叙述の整合性，関連性といった，スタティックなテキスト構造の分析と解説とに関心が終始しよう。それは，〔記述群A〕の全ての記述（二重棒線）や，〔記述群B〕の④（「表現や登場人物の発言・行動を深く読んでいくことで，登場人物の心情とどのように関わってくるのかを考え」)，⑥（「『与えてる人たちが，実は与えられてるんだな。』の部分から，この物語を通して誰が誰にどんなものを与えたのか考察したい」）などがよく伝えるところ。そして，そうしたテキスト観からする授業が，学習者と教材テキストとの接点を考えたり，教材テキストの伝えたいことを思慮判断（=「能動的なイデオロギー的了解」）したりすることなく，結果として，教材テキストの伝えたいことを絶対化し「完全に受動的な了解」を学習者に迫るものになるのである。

本年度教育実習Bにおける事前指導案に見える教育実習生の課題と原因は以上の通り。こうした課題に関わってその他にも多くの問題点が，示範授業者による観察実習生の記述分析を通して指摘されている。次節では，その問題点を列挙しよう。

３．諸記録シートの分析

【単元構想】

〔記述群Ａ〕の問題点

→学習者のものの見方・考え方の深化拡充を単元のねらいとしながらも，テキストの「問いかけ」を抽

象化できていないもの。
→学習者のものの見方・考え方の深化拡充を単元のねらいとせず，またテキストの「呼びかけ」もふまえずに，「評論文の授業」という観点のみで構想しているもの。

なお，上記に問題点について，示範授業者による分析がある。以下にそれを掲示しておこう。

以上のことから指摘できる問題点は，次の二つである。

①国語科教育観の問題

②問題領域の設定能力の問題

①は，国語科教育の目的をどう考えるかといった国語科教育観に関わる問題である。今回の教材は評論文であったが，文章の展開や構造を理解することで終ってしまう単元や論理的な文章を書く力をつけることを目的とする単元が多くみられた。また単元のねらいや目標を書いていない実習生もおり，そもそも「単元」を理解できていない可能性も指摘できる。また，テキストの話題（モンシロチョウの実験）にだけ着目し，他教科との関連といった点で単元を構想しているものがあった。

○〈教材観〉実験の仮説を立て，実験し，検証し，考察をまとめるという一連の流れをくみとっている。理科という教科学習にリンクしたものとなっており，実験することの楽しさ，おもしろさを伝えている。

○モンシロチョウは小学校の授業でも扱われる題材なため，学習者もとっつきやすく，「手旗信号」というタイトルが一体何を示しているのかを考えさせることで，内容にも入りやすくなると思われる。また全体の構成が理科の実験の一連の流れに沿っているため，気づきが好奇心へつながることや理科（科学）のおもしろさも伝えられる教材となっているため，他教科へのつながりを意識しながら指導にあたりたい。

○本教材の独特な表現方法を把握し，書き手の仮説へのこだわり，失敗をどのように受け止めて次のステップへつなげるかなど，問題解決能力を養いつつ，問題と向き合う力を伸ばす学習をめざす。「モンシロチョウの手旗信号」は，筆者が疑問に思ったこと，それを解決するための仮説の設定，それを実証するための実験，それに対する結果考察と，行ったことを時間軸通りに書かれていることから読み手は書き手の追体験ができるようになっている。そこから，どのように仮説の立証していくのか実験過程を味わうことで理科や生物のおもしろさに気づくなど，国語科の分野をとびこえて他の教科にまで興味関心を持たせられる可能性があるというのがこの教材の価値ある点であると言える。

こうした実習生の文言の背景には，「教科横断」という考えがあるのかもしれない。しかしそうだとしても「教科横断」の意味が話題が共通しているという段階でとどまっている。国語科授業の目的を学習者のものの見方・考え方の深化拡充ととらえたときにどう他教科とつながりをもつことができるのかといった視点で考えることができていない。こうした事例も含め，国語科授業を何のために行うのかやテキストを読むとはどういうことかなど単元を考える力が不足している。

②は，テキストの「呼びかけ」から抽象的な問題領域を引き出せるかといった問題である。テキストの「問いかけ」を抽象的な概念語で捉える力がないということが指摘できるだろう。

〔記述群Ｂ〕の問題点

→学習者と教材テキストとの関係を考慮しない。教材の価値が不明。
→物語内容という点での教材テキストの特徴を考慮しない。
→教材テキストの特徴を文体面・知識面から記述する。
→学習者（読者）本位の文章読解観。言語観やテキスト観の未成熟さの現れ。
→物語叙述の授業とは，叙述冒頭から訓詁注釈し授業者の予め設定したお題に即してまとめの作文を学習者が行うという典型例。
→それぞれの登場人物の心情という点でとにかく本文の該当叙述を抜き出す学習活動であって，整理できたら何か分かったり疑問が出たりするような活動ではない。
→教材テキストの叙述の検討をせずに単元の目標を設定している。
→教材本文の問い掛けや呼び掛けを掴み切れていない。
→徳目を伝えるものとして国語の授業を理解しており，教材を通して伝えたいことははっきりしているが，伝えたいことと本文の叙述との関係については検討不足。

【授業展開】

〔記述群Ａ・Ｂ共通〕の問題点

→単元構想段階で教材テキストのメッセージ（呼び掛け）にまで考えが至らなかったので，学習活動の一齣一齣が繋がっていない。
→発問が授業者にとって重要な叙述の確認に止まる。
→ワークシートを用いることで各学習活動の目的や学習者の思考を促す手段に無配慮になる。
→学習活動の内容と時間配分のバランスが悪い。学習活動での学習者の実態に対する思慮不足。学習活動での答えがとても簡単でわざわざ本文の叙述に立ち戻るまでもない。
→抽象的な本文の叙述に着目し，具体的な本文の叙述を確認する学習活動だが，抽象度を下げるための有効な活動となり得ていない。
→作中人物の気付きを通して学習者自身が自らを振り返る学習活動。作中人物の気付きの言葉と学習者との距離が埋められていない。学習者にとって本教材を読むことの意義を，学習者の側から考慮できていない。
→学習者にとっての教材は主体化する対象であるという認識があるため，教材本文のキーワードを自明的に学習者に主体化させようとしてしまう。
→学習（書く）活動の内容が不明瞭。学習者が何をどう書けばよいか理解できない。
→本文の叙述で確認がとれない登場人物の意図を，授業者の伝えたいこと本位で牽強付会に学習者に迫る学習活動である。
→学習活動が物語叙述の整合性の確認に止まる。

【板書計画】

〔記述群Ａ・Ｂ共通〕の問題点

→演奏する主人公という観点で教材テキストの重要箇所を抄出するもので，学習者にとって考える材料となり得ていない。
→学習活動が物語の整合性の確認に止まることをよく伝える。

４．本研究の成果と課題

〔記述群Ａ〕＝小原嘉昭「モンシロチョウの手旗信号」（学校図書『中学生の国語　１』採録，評論文，対象学年：中学一年生）を教材とした観察実習生の記述

◎昨日の，〈授業を観察しての気付き〉にも書いたことなのですが，本当に自分が今まで受けてきた説明文の授業とは展開が違いました。今までの説明文の授業では，「どこが問題提起？どこが本論？どこが結論？」というような，構造に重点が置かれていることが多かったので，そういった，序論（問題提起），本論，結論といった単語が一度も出てこない説明文の授業というのは，自分自身にとってすごく新しいものでした。
◎今回の講話ではより各観点についての考え方を鮮明にできたのではないかと思いました。また，教科書が与える問題，テーマをより学習者の学ぶ意義のあるものへと構築しなおさなければならないことも，ある種当然のことだと認識を改めました。また，この教材において私の考える意義は，かなりズレたものになってしまっていた，というより，初読でも充分にわかるものと混同されてしまうものだったので，より核心を捉えるためにもやはり筆者の抱える問題意識を明らかにしなければならないと感じました。

〔記述群Ｂ〕＝田口ランディ「クリスマスの仕事」（学校図書『中学生の国語　２』採録，物語文，対象学年：中学２年生）を教材とした観察実習生の記述

◎単にテキストの事象だけを問題にするのでは表面的な読みや本文の整理程度のことしかできない。一歩踏み出すためには，そのテキストだけでなく，筆者の他の著書などを見て，問題意識をあぶり出していく必要がある。…（中略）…筆者の問題意識だけを取り出すのではなく，それが生徒にとって重要な問題たり得るか，というところまでを考えなければならない，ということがよく分かった。教材を扱うことによって生徒がどのようなものを得られるのかを考え，教材を選び，場合によっては扱い方を変える必要があるのだと気づいた。
◎私自身が，物語を扱った授業で「登場人物の心情を読み取る」ことしか主に受けてこなかったので，自分が作った指導案も教材に触れるにとどまるものとなってしまいました。…（中略）…何か授業をしようとすると，どうしても教訓めいたというか，美化した結論を言いたくなってしまいます。そうならない為には，生徒観が非常にポイントになるとも感じました。

上掲の記述は，示範授業の観察と示範授業者による講話の受講とを経て，観察実習生の気づきとして記述されたもの（「書式③」）である。そこには，事前指導案に広く見られた課題を対象化し，授業を考えようとする様子（棒線）がよく窺えよう。なかでも，これら

の記述の中には教材テキストと学習者との接点の重要性を考えることで自らのテキスト観を更新しようとするものがある。それらは，「自立的で孤立したひとまとまりのもの」というテキスト観からする国語の学習（「何か授業をしようとすると，どうしても教訓めいたというか，美化した結論を言いたくなってしまいます」）から「一歩踏み出」そうとしている点で，重要な気づきであるといえるだろう。また，こうした気づきは，事前指導案として自らの構想した単元を振り返る中で得られたものなので，観察実習での諸記録シートを開発した本研究の成果を伝えるものでもあろう。

一方で，事前指導案を作成し，授業の観察と講話を経ても，自らの国語の授業観を問うたりテキスト観を更新したりする記述の見えないものも散見された。それらは，示範授業者による授業の工夫や講話内容を，普遍的で一般的な授業活性化の方法や技術と理解し受け取る点に共通する特徴がある。以下に挙げる記述が代表的なそれである。

> ◎生徒の感想を使うのは，授業自体を生徒の興味等に合わせたものにでき，生徒のモチベーション向上にもつながり，良い方法だと思った。
> ◎現場に出てたくさんの経験を積んでこないとできないような指導方法や技術も様々に盛り込まれていました。しかし，全てが全て，そういった，現場でしか身につけることのできない力であるというわけではないと感じました。

むろん，これらの記述例は，授業者の工夫をどのような観点から着想された工夫かといった点で理解したことを伝えるものではない。ともあれ，観察実習を通して，教材や学習者が何であれ授業を活性化できる働きかけを知りたかったし知ることができたということをこそよく伝えるものである。しかしながら，これは，授業者の思索の諸相，それは教材テキストという「発話の現実」（バフチン）や学習者の今に配慮することで授業で両者を取り結ぼうとするものだが，それを理解しようとする姿勢ではない。果たして，テキスト観・国語の授業観・学習者観という位相で，自らの単元構想の仕方を問い直そうとする契機にはならなかったようである。

こうした姿勢は次の諸観点からの実習生の思索や学びによって変容することが期待される。それは，①事前指導案の問題点の自己分析とその言語化，②事前指導案の修正・改善案の作成，③観察授業（教材）を踏まえた発展授業（教材）の具体的な構想，④テキスト観の検討といった観点である。また，以下の観点もここに加えたい。それは，本論では詳述しなかった観察実習生の課題克服の観点だが，諸記録シートの記述には，誤字・脱字・体裁の整わない記述ぶり・術語誤認による記述内容不明の箇所などが散見された。これに関しては基礎学力定着の問題もあろうが，⑤国語の学力を考え広く向上させようとすること。こうした観点からする学びも必要になろう。

以上に列挙した観点からする学びの中でこそ，講話を参照しつつ事前指導案と示範授業とを比較することで自らのテキスト観・国語の授業観・学習者観を問い直し本実習に向けて本当の意味での授業力を身につけることが可能になろう。本研究は，上記諸観点の反映を記録シート上に具体化すること。これを研究課題とし，次年度以降，観察実習生にとってより実りのある学びの一契機となるよう，諸記録シートの記述項目を整理し，改訂していきたい。

引用（参考）文献

1）ミハイル・バフチン，〔訳〕桑野隆（2002）「西欧における最新言語学思潮」，桑野隆・小林潔編訳『バフチン言語論入門』せりか書房，PP.78.

※資料編『国語科における観察実習の研究（２）―資料編』

冊子構成

> 【研究の目的と方法】
> 【現代文（中１・小原嘉昭「モンシロチョウの手旗信号」）】
> 1　教材本文
> 2　示範授業指導案と事前指導案（書式①）
> 3　示範授業と観察記録（書式②）
> 4　講話と観察実習生の振り返り（書式③）
> 5　示範授業のねらい
> 【現代文（中２・田口ランディ「クリスマスの仕事」】
> 1　教材本文
> 2　示範授業指導案と事前指導案（書式①）
> 3　示範授業と観察記録（書式②）
> 4　講話と観察実習生の振り返り（書式③）
> 5　示範授業者による分析
> 【総論】

冊子の入手につきましては，下記問い合わせ先まで

〒721-8551　福山市春日町5－14－1
広島大学附属福山中高等学校国語科
Tel　084－941－8350　　Fax　084－941－8356